

〈研究筆記〉

少女病

陳芃彪 李宗儒 劉芸芳

前言

《少女病》，是田山花袋在完成《蒲團》這本大作之前的前一部短篇小說，而《蒲團》是田山花袋此創作階段的最後一篇作品，但是在前一部的《少女病》中就可以隱隱約約的感受到一些端倪。

藉由閱讀田山花袋的小說後，提出一些想法與比較，得此可以更了解《少女病》所要象徵的意義及想傳達給讀者的東西。在這邊我們分成兩大部分來討論，《少女病》裡所隱含的意義，及和《蒲團》這本田山花袋的代表作之間的關聯和比較。

故事的主角，杉田古城，是一位在雜誌社上班的小職員。他對於現實生活有諸多不滿，而以觀察電車上的少女變成生活重心。並且不斷重覆著同樣的，對現實絕望和尋找希望的生活模式，直到死亡的那一刻到來為止。

本文將分以下主題段落來探討：

一、《少女病》的部分

1. 《少女病》為何要叫做《少女病》
2. 現實與理想
3. 對青春的渴望
4. 死的意義

二、《少女病》與《蒲團》的關係

1. 寂寞感在於緬懷以前
2. 中年之戀
3. 嗅覺

三、總結

一、《少女病》的部分：

1. 《少女病》為何要叫做《少女病》？

在只聽到小說名字而還未詳閱之前，想必很多人對小說名字的第一印象大多是「少女的思春情懷」，「生病的少女」，或是「少女階段所得的病」之類的想法，但從歷史背景來探討的話，會發現，其實「少女」一詞代表著的不只是「青春年華的女生」，更是代表著當時的日本社會的一個現象。

「少女」這個名詞出現於1877年之後，當時創刊的《穎才新誌》的青年傾向雜誌上開始被大家所討論著，

「少女時代は、少女生涯における特別なる時代」であり、「最も深い女子の胸中に刻まれたる時代」であり、「故に少女時代追懐の情は、其襁褓時代よりも、新婚時代よりも、小児養育時代よりも、多くの感触を女子に与ふるなり」と考えられているからである。さらに、「少女」は「奇妙なり、不思議なるもの」でその特徴を掴みづらいものの、「最も感情的なり」とし、「何れの少女も、名誉を軽んせざる」ものであるとし、「繊弱なる」とする。また、「少女の希望は、限りなく美しく、定まりなく美しく、あてどなく美しきなり」。「絶えず慙々自適、自由円満の希望を発見し、之に向て馳するなり」。そして、「少女の容貌は、一般に可愛らし、其天真を流露すればなり。」「少女」には「少女」の特別な魅力があるというのである。（今田絵里香，2007 pp. 41-42）

但很明顯的，故事的主人公杉田古城所喜歡的「少女們」並不都是如此青春年華的女子，裡面也有明確被指出年齡的二十幾歲女子。所以依照著當時的時代背景去探討，可以發現了《少女病》中的「少女」所指的和一般所定義的少女是截然不同的。由下文可說明：

寺子屋から学校教育の発展、社会教育の強化は、一方で国策に従って夫を支え、「家」のため子供を生み訓育する良妻賢母主義で女性を縛ることとなった。（児玉幸多、林屋辰三郎、永原慶二，1990 p. 143）

此篇作品的時代背景剛好是在於1900年左右，當時世界各國都處於多戰的年代。日本政府爲了鞏固後線的國內支援而採取了這樣的政策。從學校教育開始就灌輸女性這樣的觀念。

因此，從《少女病》中所出現的女性身上，皆可感受得出那個時代的女性特徵。

也因此，會取名叫《少女病》，除了花袋想表達出他自己內心醜陋的一面——對「少女」的愛（在《蒲團》中主角對於還是學生的女徒弟的愛所想表達的，則是對美知代（現實中，田山花袋的女弟子，岡田美知代的愛），在這裡伊藤整的《日本文壇史》有提到當他不知美知代和永代靜雄的愛戀時，在寫「名張乙女」時，此篇還以天真的角度做結。知道他們兩個的事之後，打擊花袋自己對少女愛好、戀愛的多愁善感，所以花袋在太陽報發表《少女病》，可能花袋有被美知代和永代靜雄的愛戀刺激到。根據原文如下：

彼が「名張乙女」を書いた時、花袋はまだ美知代と永代静雄の恋愛事件を知らず、妻と美知代に対する彼の気持ちを持って、この小説の甘い結末を作っていたのであった。（伊藤整，1996 p. 56）

2. 現實與理想：

在作品中的現實世界對主角來說是個沒有生存動力的空間。現實世界的一切總是和自己的理想差距甚大。自己所擁有的一切都不是自己所想要的，而抓不到的東西總是如此的美好。

《少女病》小說中對於現實的各種敘述：

- 對於妻子的看法：

- (1) 色は衰えている (p. 15)
- (2) やや旧派の束髪に結って、着物は木綿の縞物を着て、海老茶色の帯 (p. 15)
- (3) 洗濯の手を動かすたびに、かすかに揺く (p. 15)
- (4) つまらない、年を老ってしまった (p. 23)

- 對於工作地點的看法：

- (1) 陰気なことおびたしい (p. 21)
- (2) 空想はすっかり覚めてしまったような侘しい気がして (p. 21)
- (3) 陰気な机 (p. 21)
- (4) 校正の穴埋めの厭なこと、雑誌の編集の無意味なること (p. 22)
- (5) 編集長がまた皮肉な男 (p. 22)
- (6) 薄暗い陰気な室 (p. 23)

- 世人的輿論：

(1) ついにはこの男と少女ということが文壇の笑い草の種となって (p. 16)

(2) 書く小説も文章も皆笑い声の中に没却されてしまった (p. 16)

(3) いかな猛獣とでも闘うというような風采と体格とを持っている (p. 16)

• 朋友對於古城的嘲諷：

(1) 一種の病気かもしれんよ (p. 17)

(2) 生理的に、どこか陥落しているんじゃないかしらん (p. 17)

對於妻子的部分和其他的部分相較之下篇幅不長，但已經足以讓我們評斷出他的妻子在除了外表上的年華老去之外，另外就是可以感受出來屬於「舊時代」的象徵。而工作場合的部分，除了對自己所處工作場所環境不滿之外，另外就是老闆看待自己的態度。而朋友的部分大因為占的篇幅比較多，所以比較可以明顯看出田山花袋想藉此表達的意義吧。在這會想是田山花袋自己對藉由其他角色來否定自己寄託人物的性格。田山花袋想要告訴世人，寫少女小說、崇拜少女是不好的，藉由友人或上司或輿論，傳達出警世的效果，如同我們所知這是放棄少女趣味之作，由下列原文可知：

この事件は田山花袋の心内に根を下していた少女趣味、恋愛のロマンチズムに決定的を打撃を与えた。明治四十年の五月、花袋は「太陽」に小説「少女病」を書いた。それは自分の少女趣味の放棄宣言であった。(伊藤整, 1996 p. 57)

因為小說有很多場景是杉田古城在觀察少女比較多，藉由其他角色的諷刺，想傳達這是不好的行爲。所以我們把那些友人等，假設是田山花袋故意設計出來，來否定他之前寫的文章，同時也否定只重外表的社會風氣和那種浪漫主義色彩濃厚的戀愛神聖論。田山花袋希望讀者能更注重社會的現實。在文中，當杉田古城有想死的念頭時，他想到了他的妻子，如果他這樣死了，妻小該怎麼辦？由此可看自然主義的田山花袋，是針對社會的現實而寫的。而以現在的社會來看，或許無味的、一成不變的生活，不斷的圍繞在我們的周遭，可是人活在世上有一定的責任，我們若自私的輕生的話，只不過是把責任推卸給其他人。如果今天杉田古城輕生的話，他的小孩與妻子，該要如何過活？

3.對青春的渴望：

杉田古城對於現實生活的不滿（妻子年華老去、被譏諷有病等），讓他只能把心靈寄托於自己的興趣（在電車上觀察少女們）之上。原文中提到：

寂しさ、寂しさ、寂しさ、この寂しさを救ってくれるものはないか、美しい姿の唯一つでいいから、白い腕にこの身を巻いてくれるものはないか。そうしたら、きっと復活する。希望、奮闘、勉勵、必ずそこに生命を発見する。この濁った血が新しくなれると思う。けれどこの男は実際それによって、新しい勇気を恢復することができるかどうかはもちろん疑問だ。（《少女病》， p. 24）

這樣的反差讓他對於青春肉體渴望的意念顯得更加強烈。而且觀察了故事中被主角戀上的女性角色，除了皆有「少女」的氣質外，另外還可以推測為應該都是處女。這也和小說中所提及的「戀愛神聖論」有著相當大的關聯。關於戀愛神聖論，我們從《蒲團》「神聖なる恋愛」這個詞來作以下兩點的延伸。

第一點，原文如下：

四月末に帰国、九月に上京、そして今回の事件が起った。
 今回の事件とは他でも無い。芳子は恋人を得た。そして上京の途次、恋人と相携えて京都嵯峨に遊んだ。その遊んだ二日の日数が出発と着京との時日に符合せぬので、東京と備中との間に手紙の往復があつて、詰問した結果は恋愛、神聖なる恋愛、二人は決して罪を犯してはおらぬが、将来は如何にしてもこの恋を遂げたいとの切なる願望。時雄は芳子の師として、この恋の証人として一面月下氷人の役目を余儀なくさせられたのであつた。（《蒲團》， p. 136）

芳子は師の前にその恋の神聖なるを神懸けて誓つた。故郷の親達は、学生の身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既にその精神の墮落であると云つたが、決してそんな汚れた行為はない。互に恋を自覚したのは、寧ろ京都で別れてからで、東京に帰って来てみると、男から熱烈なる手紙が来ていた。それで始めて将来の約束をしたような次第で、決して罪を犯したようなことは無いと女は涙を流して言った。時雄は胸に至大の犠牲を感じながらも、その二人の所謂神聖なる恋の為に力を尽すべく余儀なくされた。（《蒲團》， pp. 136-137）

在這劃線部分指出了他們崇尚的戀愛神聖，是絕對不犯罪的，同時在《田山花袋集》第

157頁注釋部分有提到「神聖なる恋 肉体関係におちいることを「罪」として、そうならないのを「神聖」と称している。」，很明顯看出他們的罪是指發生性關係。而且對此鄙視，說這是一種墮落、骯髒的行為，並由原文的引用可以發現，特別是原文劃線的地方。

第二點，文中提到田中時雄自問神聖的戀愛是什麼，原文如下：

覗いてみたが、芳子の室に燈火の光が見えぬ。まだ帰って来ぬとみえる。時雄の胸はまた燃えた。この夜、この暗い夜に恋しい男と二人！ 何をしているか解らぬ。こういう常識を欠いた行為を取って、神聖なる恋とは何事？汚れたる行為の無いのを弁明するとは何事？（《蒲團》，p. 147）

根據《田山花袋集》注釋特別點出是第四章芳子的信中提到：

「万一の時にはあの時嵯峨と一緒に参った友人を証人にして、二人の間が決して汚れた関係の無いことを弁明し、別れて後互に感じた二人の恋愛をも打明けて、先生にお縋り申して郷里の父母の方へも逐一言って頂こうと決心して参りましたそうです。」本文第四章の芳子の手紙に、「私等二人の神聖な真面目な恋」とか二人の間が決して汚れた関係の無いことを弁明し」というような表現のあったことをさす。（《蒲團》，p. 157）

「将来までも私等二人の神聖な真面目な恋の証人とも保護者ともなって下さるということを話しましたところ。」（《蒲團》，p. 157）

因此，可推斷是花袋所說戀愛神聖在「私等二人の神聖な真面目な恋」、「二人の間が決して汚れた関係の無いことを弁明し」這兩個地方說明，於是我們推斷「少女病」的「戀愛神聖論」可以「神聖なる恋」這詞的觀念來說明，戀愛神聖論指的是心靈契合大於肉體滿足。

最後，對於年輕女子的渴望，究竟是對於青春年華的嚮往、未涉世的單純、年輕的肉體、還是指的是對未來充滿著希望的感覺。雖然說在作品的表現上可能讓人比較明顯的感覺到的是對於年輕肉體的渴望，但在閱讀完此篇之後，了解到了杉田古城的現實生活是如此的不平順之後，可以把它歸類在「年輕就是希望」。因為年輕未涉世，對於社會的真實面總是

抱著期望，這樣的特質將會隨著進入了社會之後漸漸消失。所以在杉田古城想在年輕的女子身上追尋的並不是年輕的肉體這樣膚淺的生理慾，而是那份純真無瑕的心靈上的單純吧！

也正因為現實和精神生活的反差如此大，讀者們也能體會那種被刺痛的感受而對主角的看法由一開始的只是單純的怪癖慢慢的轉換成了可以諒解的同情。少女只是杉田古城的一個依靠，活下去的依靠。只是在同情萌芽的那一瞬間，故事也就此結束了。

4.死的意義：

故事最後，杉田古城的死對許多人而言應該都是很難以想像或覺得過於措手不及的結局。因為杉田古城原來有尋死的意念，但後來因為找到了「獵物」而又點燃了心中那把生命之火，在當他好不容易覺得生命又有活下去的希望時，事情就發生的這麼突然，而主角就以意想不到的方式結束了他的生命。不只是出於杉田古城自己的意想之外，就連許多讀者都無法接受故事怎麼會以這樣的結局作為終點。原文如下：

死んだ方が好い？ 死んだら、妻や子はどうする？ この念はもうかすかになって、反響を与えぬほどその心は神経的に陥落してしまった。寂しさ、寂しさ、寂しさ、この寂しさを救ってくれるものはないか、美しい姿の唯一つでいいから、白い腕にこの身を巻いてくれるものはないか。そうしたら、きっと復活する。希望、奮闘、勉強、必ずそこに生命を発見する。この濁った血が新しくなれると思う。けれどこの男は実際それによって、新しい勇気を恢復することができるかどうかはもちろん疑問だ。（《少女病》，p. 24）

パイと発車の笛が鳴って、車台が一、二間ほど出て、急にまたその速力が早められた時、どうした機会か少なくとも横にいた乗客の二、三が中心を失って倒れかかってきたためでもあろうが、令嬢の美にうっとりとしていたかれの手が真鍮の棒から離れたと同時に、その大きな体はみごとにとんぼがえりを打って、なんのことはない大きな毬のように、ころころと線路の上に転がり落ちた。危ないと車掌が絶叫したのも遅し早し、上りの電車が運悪く地を撼かしてやってきたので、たちまちその黒い大きい一塊物は、あなやという間に、三、四間ずるずると引き摺られて、紅い血が一線長くレールを染めた。（《少女病》，p. 25）

雖然最後主角還是死了，不過或許這樣的死法對他來說比較適合。他並沒特別描述他的死狀，而且這種死法感覺很唯美。主角是被電車撞死的，電車可以說是一種現代化的工具，在某個角度來看，杉田古城是死在不停前進的社會中。故事的創作背景為明治維新的現代化後，很多舊的與新的思想在做磨合的時代，田山花袋也在磨合自己文學的寫作手法。故事中，至少杉田古城不是抱著遺憾的選擇了自殺。在當時，他的精神狀態可以說是處於一個非常的滿足的「櫻花盛開狀態」下。世界上讓人不如意的事何其之多，若是因被煩惱纏身而痛苦的死去那豈不過於太可悲。若能像是主角在自己心靈最為快樂的狀態下死去，應該是很多人都很嚮往的人生句號。而這或許也是田山花袋想訴說的，自己內心所嚮往的結束生命的方式，希望盡全力到某個點，然後結束。儘管他所追求的東西對許多人來說是醜陋的，是有問題的想法，但那又如何。每個人都會有自己心中所定下的目標，或是鐘愛的事物，別人怎麼看都不重要，重要的是自己認為對自己來說很有意義這就夠了。然後就像是努力展現最美麗的一刻的櫻花一樣，那個畫面就像是一幅畫般的唯美。而田山花袋也許也是正在追求著這樣的生命，期待在極為美好的一刻下結束自己的生命。

二、《少女病》與《蒲團》的關係

田山花袋在明治40年先後發表《少女病》和《蒲團》，而在明治37年就發表「露骨的描寫」，不隱晦寫出自己的想法。根據下列原文：

近日文壇に技巧といふことを説く者がある。技巧か、技巧か、自分は既に明治の文壇がいかにかに尊い犠牲をこの所謂技巧なるものに払ったかを嘆息するもの、一人で、この所謂技巧を蹂躪するにあらざれば、日本の文学はとしても完全なる発展を為すことは出来ぬと思ふ。

自分は文章に就いてあらゆる術を排するといふのではない。文章が思想等一致するまでの苦心、それは充分に為んければならぬのは知つて居る。(田山花袋、《定本 花袋全集第二十六卷(1995)》、「露骨なる描写より」、pp. 154-155)

關於露骨的描寫，是用不隱諱單刀直入的描寫方式，寫出田山花袋的慾望。在保守的社會，像杉田古城想要接觸少女的那種想法，或許很多人都有，但是敢說出來的沒幾個。在《少女病》中，田山花袋穿插幾個批評杉田古城的角色，像是他的朋友和上司，不斷的在數落他，批評杉田古城不停迷戀少女的這件事情，在當時說不定也是會被這樣批評，田山花袋

還是在《少女病》中很直接的寫了出來。

在說明《少女病》和《蒲團》之間的連結前，要先說明一下日本當時的社會背景。明治20~30年代的浪漫主義時期日本文學的特徵，有一個很特別的點是明治40年代的自然主義的主要作家包括田山花袋，之前都是浪漫派的詩人，這裡不在探究浪漫主義的由來，只可能推斷是跟基督教跟藝術性的自覺有關。明治維新後福澤諭吉提倡「脫亞入歐論」，在地狹人稠的日本開始向外擴張，其實日本因為本身國內社會問題，藉戰爭可以轉移人民的注意力，而此時作家對此已經無法使用尾崎紅葉的硯友社那種寫浪漫詩的寫法去描述社會的黑暗面及反戰的思想，所以產生的一種寫實主義的文體。再來，明治39年島崎藤村的《破戒》，對自然逼真的表現，和田山花袋的《蒲團》，可以說是讓和原先左拉的自然主義與日本自然主義有不一樣的面貌，因而產生作家一方面敘述自己的生活經驗，一方面揭露自己的心境。

若《少女病》是《蒲團》的前身，從和田謹吾的《田山花袋集》解說中提到：

當時花袋に主張は、事實を重んじようということにあった。「蒲團」もまた「唯、自己は人生の中から発見したある事實、それ読者の眼の前に広げて見せただけのことである」（『小説作法』）といっている。その点では、「蒲團」以前もそれ以後も、方法態度に変わりはない。ただ「蒲團」に致って初めて採られた新しい方法（実はその直前の「少女病」〈「太陽」明40・5〉ですでに試みられていたのだが）は、その事實を自己の事實に密着させたことである。意外な「蒲團」成功の秘密を、花袋は敏感にそこに見出したに違いない。つつみかくすことなく、醜い人間の事實としての自己をさらけ出す。そこに花袋は活路を見出した。それは、実は「少女病」を書いた時のかれの決意であったかも知れない。その作をステップとして初めて「蒲團」が書き得たと見る方が正しいのかもしれない。最初の『花袋全集』（大十二）編集の時、「蒲團」以前の作を全面的に切り捨ててしまった花袋が、「少女病」だけを残したことを思えば、「蒲團」以後の作風は、「少女病」認識によって始まった考え得るものである。（《蒲團》、pp. 36-37）

我們推斷可能是想要先以《少女病》來試探大眾的反應，因為《蒲團》與《少女病》有一個很不一樣的點，就是《蒲團》主角為作者田山花袋本身的告白，另一方面，《少女病》結尾悲劇的寫法，在某個方面有強烈地虛構性，雖然也不代表《蒲團》為一系列田山花袋描

寫自己的周遭生活，同時也是田山花袋自身的告白。或許有人質疑《蒲團》也有虛構的可能性，而《蒲團》與《少女病》有著不尋常的關連在幾經比較後是顯而易見的。《少女病》有些部分與田山花袋的生平不謀而合也是事實，可是故事走向並沒有很明顯的與田山花袋生活產生關聯，在此我們不排斥田山花袋有藉由杉田古城的角色來嘗試著提出他的想法，關於他相信這種寫法是因應社會而生。

不過《蒲團》的背景跟《少女病》的主角杉田古城比較的話，相似的地方，比如說都有寫小說，對婚姻感到疲倦，對生活以覺得索然無味，經常覺得孤獨。所以以下針對幾點做了論述：

1.寂寞感在於緬懷以前

原文如下：

若いころには、相応に名も出て、二、三の作品はずいぶん喝采されたこともある。（《少女病》，p.16）

若い時分、盛んにいわゆる少女小説を書いて、一時はずいぶん青年を魅せしめたものだが、観察も思想もないあくがれ小説がそういつまで人に飽きられずにいることができよう。（《少女病》，p.16）

杉田古城年輕時因寫了少女小說有一點小成就，如今卻在成了雜誌社的社員做這種無聊瑣碎的工作。原文：

「少女万歳ですな！」と編集員の一人が相槌を打って冷やかした（《少女病》，p.23）

在這邊，我們得知上司對杉田古城寫的文章很嗤之以鼻。

而這裡，我們也可以感覺到杉田古城與田山花袋的相似度，我們可由此推測出田山花袋想要放棄他以前的作品風格。可是《蒲團》中芳子的角色——現實中的美知代，也是一位文學少女，所以可確定的是，他還是很喜歡少女的。兩篇文章都是提到中年男子對少女的愛，也可能是越到中年越感年輕的可貴，但此風格的作品卻只到《蒲團》爲此，也許就像是他在

《少女病》中說的，想要作改變，而不希望寫作的題材都再以少女爲主了。

另外一個緬懷以前的部分，原文：

若い時、ああいうふうで、むやみに恋愛神聖論者を気どって、口ではきれいなことを言っている、本能が承知しないから、ついみずから傷つけて快を取るといようなことになる。(《少女病》，p. 18)

在這邊可隱約感覺出田山花袋在嘲弄感傷的浪漫主義文學，這也說不定是有點在嘲弄自己之前的美文小說，田山花袋初期的作品會用比較感傷且刻意的修飾去表達，這裡說不定在告戒自己往真實的暴露爲主。這樣說起來，有點文以載道的意味，告訴自己不要過分重視文字的華麗，想把事實說出來。原文：

もう生きている価値がない、死んだ方が好い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、とかれは大きな体格を運びながら考えた。人間は本能がたいせつだよ。(《少女病》，p. 24)

這句話不隱諱的說出人類的本能——慾望，符合先前提及的，田山花袋的「露骨的表现」寫作手法。赤裸裸說明人類的本能。不故意摻雜自己想修飾的話語，原原本本將事實說出來。

2. 中年之戀

兩篇作品皆是圍繞著中年男子的愛戀。至於那種愛戀，是明治時期的產物，與《少女病》中提到的「戀愛神聖論」有些關聯。在《少女病》中，並沒有那麼強調「靈」與「肉」是怎樣的關係，可是在《蒲團》中，似乎強調「靈」多於「肉」。論《蒲團》裡，主角時雄對芳子的描述，可以知道芳子在時雄的眼中是很新潮的女性，上的是基督教的學校，還跑來東京跟他學寫小說，裝扮化妝等。當時雄知道芳子有戀人秀夫時，受到很大的衝擊，而且時雄最在意的一點就是他們兩人有沒有發生了肉體關係。也就是因爲他認爲肉體上的關係是有罪的，是墮落的，而戀的神聖就是只有「靈」，沒有「靈」只有「肉」的愛戀是虛偽的。根據《蒲團》原文：

「いや、それは説明ができる。十八、九でなければそういうことはあるまいと言
うけれど、それはいくらかもある。先生、きっと今でもやっているに相違ない。若
い時、ああいうふうで、むやみに恋愛神聖論者を気どって、口ではきれいなこと
を言っている、本能が承知しないから、ついみずから傷つけて快を取るという
ようなことになる。そしてそれが習慣になると、病的になって、本能の充分の働
きをすることができなくなる。先生のはきっとそれだ。つまり、前にも言った
が、肉と霊とがしっくり調和することができんのだよ。それにしてもおもしろい
じゃないか、健全をもってみずからも任じ、人も許していたものが、今では不健
全も不健全、デカダンの標本になったのは、これというのも本能をないがしろに
したからだ。君たちは僕が本能万能説を抱いているのをいつも攻撃するけれど、
実際、人間は本能がたいせつだよ。本能に従わぬ奴は生存しておられんさ」と
滔々として弁じた。（《蒲團》，p. 149）

以旁觀者的角度來敘述古城，但若以花袋為主角是否來延伸出，太在意戀愛神聖論，其
實古城的少女病是沒有肉體來調和，而產生的身心不健全。

在《蒲團》中也提到：「四五年来の女子教育の勃興、女子大学の設立、庇髪、海老茶
袴、男と並んで歩くのをはにかむようなものは一人も無くなった。」

其中，興女學的興起也代表女性地位漸漸抬頭，女性感覺活得比較有思想，所以同樣
的，在《少女病》中，主角並不只有欣賞少女們的年輕，還有旺盛的學習能力，之所以覺得
自己的妻子不夠吸引人，是因為是舊式的想法的人。

同樣的在《蒲團》有提到：「先生に教えて頂いた新しい明治の女子としての務め、そ
れを私は行っておりませんでした。矢張私は旧派の女、新しい思想を行う勇氣を持ってお
りませんでした。」

前面表示，芳子跟時雄說他自己是舊派的女性，可以推測在思想轉換期非常興盛的明治
時期，過去與未來在衝擊著。

3. 嗅覺

嗅覺和視覺都是可以給時給予人很大衝擊的工具。尤其是嗅覺，不像是視覺一般，可以
簡單避開的。一般若不想要被視覺影響的話，只要闔上眼睛不去看即可。但是味道則是從鼻
腔進入我們的肺部，影響範圍遍及到全身。一個人可以看不見世界，但卻不可不呼吸；如果

想避開不想看到的事物，只要把頭撇開即可，可是我們卻不能選擇我們所呼吸的氣體。然而美好的氣味可以讓身心受到治癒，更甚者可以勾起一個人的慾望。相反的，如果只是摻雜著髮油的餘味的話，是不可能對一個人的身心有所效用的，更別說是去勾起一個人的慾望。

在《少女病》中，主角杉田古城經常只是想著那些少女能成為自己生命中一部分有多好，想著他們的髮香，或觸碰到她們的肌膚，對於那些渴望不諱言的表現出來。

こみ合った電車の中の美しい娘、これほどかれに趣味深くうれしく感ぜられるものはないので、今までにも既に幾度となくその嬉しさを経験した。柔かい着物が触る。えならぬ香水のかおりがする。温かい肉の触感が言うに言われぬ思いをそそる。ことに、女の髪の毛の匂いというものは、一種のはげしい望みを男に起こさせるもので、それがなんとも名状せられぬ愉快をかれに与えるのであった。（《少女病》， p. 21）

要說他是色狼或許又不是這樣，因為他並沒有侵犯到別人，若硬要判一個罪，或許是思想邪惡吧。可是假設我們以很自然的角度看，他也只不過在述說一個「人」的渴望。我們不去想這些東西，並不是因為我們比較純潔，而是我們被環境給壓抑住了，被文明化了。就像我們要以欣賞的角度來觀賞人類裸體的美，不要以有色的眼光，是一樣的道理。只不過為什麼會覺得這樣子的杉田古城的行為是噁心、不入流的，也因此被一般人(包括在朋友間)認定是有病的呢？那是由於大多數人認為，都已經中年了，不應該去對年輕的女子有憧憬，或許要安分守己才是對的，若真有這種想法的話，就把自己一個人關在房裡去幻想就可以了。

だって、あまりおかしい、それも十八、九とか二十二、三とかなら、そういうこともあるかもしれないが、細君があつて、子供が二人まであつて、そして年は三十八にもなろうというんじゃないか。（《少女病》， p. 18）

杉田はむっとしたが、くだらん奴を相手にしてもと思って、他方を向いてしまった。実に癩にさわると、三十七の己を冷やかす気が知れぬと思った。（《少女病》， p. 23）

可是他甚至是把想法寫了出來，還出版成小說，或許他所想要強調的不只是外表的年輕

而已，應該是少女那一種不成熟的美——對給予很多灌溉，幫助她們成熟的過程，也同時是對成長的憧憬。而《蒲團》的結尾，時雄去聞芳子的棉被，想尋找芳子剩下來的餘味，不是也跟《少女病》中杉田古城喜歡於少女的髮香有異曲同工之妙。

三、總結

相信大家看以上的分析也會覺得《少女病》和《蒲團》某些地方非常的雷同，而從田山花袋的這兩件作品中不難發現當時日本保守的社會思想逐漸在變動，或許當時戰爭過於頻繁，一些關於軍隊的字眼也反映在田山花袋《少女病》的作品裡。另外這時期的田山花袋的寫作的手法也是值得一提的地方，《少女病》和《蒲團》的寫作手法都是以自然主義為基準，徹底反對舊道德、排除技巧，主張一切按照事物原來的樣子，這些都可以從田山花袋筆下的《少女病》和《蒲團》的兩位男主角如何對女性的渴求，直接描繪出內心的渴望、迷戀等等將無法抑制的感情，毫不隱諱的攤開在世人面前。也許看到《少女病》和《蒲團》的讀者，會覺得他把自身的性慾和對女子最深層的慾望寫得太過於露骨，甚至讓人覺得很變態，但其實田山花袋只是把人類最原始的渴望用文字表達出來罷了。

雖然這兩篇故事都圍繞著性慾的話題，但田山花袋卻只把它裝在心靈或精神層面而已，並不算有真正的肉體接觸，例如《少女病》中，杉田古城經過喜歡的女生的時候可能會來個不經意的小摩擦、或聞聞她的髮香，而《蒲團》的結尾則是，時雄抱著芳子的棉被，想聞芳子剩下來的餘味，這兩篇作品裡的人物都沒有出現什麼特別親暱的行為，只有精神層面上的愛戀。可能是田山花袋對「戀愛神聖論」有些憧憬，也許「靈」對他而言可能才是最重要的。最後，在《少女病》中一開始看到杉田古城對少女們的迷戀，可能覺得這只是他對年輕女孩的性慾幻想，但隨著情節發展知道才知道，古城是一直陷在苦悶生活裡的一位中年孤獨男子，迷戀少女的原因是對年輕有所嚮往。

因此，不論是高矮胖瘦、是美或醜，只要是還年輕，就可能在未來創造出無限的可能和希望，這也或許是古城他可以在少女們面前，不論少女們是美或醜都找到讓自己心動的地方的原因吧。因為古城的生活算是已經定型了，有固定的工作、也有妻子兒女，雖然對現況感到苦悶，但想要改變一切也似乎不太可能，所以才覺得古城在年輕的女子身上追尋的並不是年輕的肉體，而是那份純真無瑕的心靈上的單純，還有想要改變現況。在看完《少女病》再看《蒲團》，會覺得兩位主角的心境其實都是想要在現實中尋求另一番希望及感動！

（陳芃彰 李宗儒 劉芸芳 東海大學日本語文學系大學部二年級）

附註

1. 本篇所截取之《少女病》本文部分，取自於：集英社文庫『私小説名作選』日本ペンクラブ編 中村光夫選 昭和55年6月 集英社
2. 本篇所截取之《蒲團》本文部分，取自於：日本近代文學大系《田山花袋集》 角川書店

參考書目

1. 児玉幸多、林屋辰三郎、永原慶二《日本の歴史-日本史研究事典》(1990)、初版、集英社
2. 有精堂編輯部《近代小説研究必攜1—卒論・レポートを書くために—》、初版、有精堂出版株式会社
3. 今田絵里香《「少女」の社会史》(2007)、初版、勁草書房
4. 伊藤整《日本文壇史11自然主義の勃興期》(1996)、講談社
5. 伊藤整《日本文壇史12自然主義の最盛期》(1996)、講談社
6. 伊藤整《日本文壇史9日露戦争の新文学》(1996)、講談社
7. 伊藤整《日本文壇史6明治思潮の轉換期》(1996)、講談社
8. 劉崇稜《日本近代文學概説》(民86)、初版、三民書局
9. 田山花袋《定本 花袋全集第二十六卷》(1995)、臨川書店